

## ジオパークと地域おこし

株式会社防災地質研究所長・鹿児島大学名誉教授 岩松 暉



9月27日御嶽山が噴火し多数の犠牲者が出た。御嶽山は1979年に噴火するまでは死火山と言われ、何百年も信仰の山・民謡に唄われる山として親しまれてきた。今回も活火山と意識して登った人はどのくらいいたのだろうか。地学的に言えば、日本列島は若い変動帯にあり、かつ、アジアモンスーン地帯に位置する。山紫水明の地は、その変動の結果生み出されたものだ。安定大陸の荒涼とした砂漠に比し、肥沃な土壌と温和な気候など多くの恵みを受けている。同時に、恵みと災いは裏腹の関係にある。戦後の高度成長期には、たまたま地学的な静穏期に当たっていた。しかし、近頃日本列島は活動期に入ったようだ。南海トラフの連動型地震や富士山噴火が取り沙汰されている所以である。3.11東日本大震災では、自分が住む地域の成り立ちを知っているかどうかが生死を分ける鍵だと身に染みて感じさせられた。高級住宅地と言われていた浦安も実は液状化しやすい地盤だったのである。通勤の便といった点からしか評価されて来なかった。変動帯に住む日本人にとって、地学は国民教養でなければならない。

ところで、近頃「ジオパーク」という言葉を時々耳にする機会があると思う。ジオパークは世界遺産同様、ユネスコのプログラムである。世界遺産はOUV(Outstanding Universal Value)、つまり世界で唯一つたぐいまれな価値を持つもので、した

がって、保全が主目的となる。これに対し、ジオパークは大地の公園とも訳され、保全と共に利活用が目指される。ユネスコのガイドラインによれば、地域の地質遺産や歴史・考古などの文化遺産を保全すると共に、教育に生かし、かつ、ジオツーリズムなどを通じて地域の振興につなげなければならないという。こうして認定されたジオパークが日本では2014年9月時点で36ヶ所ある。うち世界ジオパークが洞爺湖有珠山・糸魚川・島原半島・山陰海岸・室戸・阿蘇の7ヶ所である。

実はこのジオパークを日本で立ち上げた張本人が私である。その動機の一つが冒頭述べた日本人の地学リテラシーの欠如に対する危機感であった。2004年スマトラ島沖大地震の時、日本人観光客が地震後すぐ「ツナミだ!」と叫んで逃げてくれたら、どれほど多くの人命が助かったかわからない。何しろtsunamiは英語になっているから通じたはずだ。地震国育ちなのに、日本人が悠然とビデオカメラを回していたのである。そのために亡くなった方もあるに違いない。「稲村の火」の教訓は忘れ去られてしまった。

もう一つ、国立科学博物館の展示に衝撃を受けた。親指ほどの細い縄文人の骨が飾ってあり、「生まれながらの小児麻痺だったが、手厚い介護で天寿を全うした」と解説にあった。どんぐりを求めて流浪していたあの狩猟採集の時代である。大地

の子・縄文人は心優しかったのだ。しかるに飽食の時代の現代日本はどうであろうか。親殺し・子殺し・虐待と耳を覆いたくなる話ばかり、1億総都会人になり、感性が麻痺したのではないだろうか。子供たちを自然の中で心豊かに育てたいものだと思っただけで、ジオパークはその有力な方法の一つになるだろうと考えたのである。

第三は地方である。一極集中で地方は疲弊しきっており、「限界集落」なる言葉も生まれた。私の住む鹿児島県も例外ではなく、170万県民の3人に1人が鹿児島市民で、極端な一極集中である。地質調査で山間部の集落に行ったら、立派な家があり、農機具などそのまま立てかけてあるのに、人っ子一人いない。子供の笑い声どころか、犬も鶏も、雀さえ鳴いていないのである。明るい日差しの中でのこの光景は、崩れかけた幽霊屋敷よりも背筋が寒くなり、ゾッとした。地方の再建は待たない状況である。ジオパークが地域振興の起爆剤にならないだろうか、と思ったのである。

ユネスコガイドラインの評価表では、素晴らしい地質遺産があることよりも、確固たる持続可能な運営組織が地元にあるか否かのほうが、比重が高い。ユネスコは途上国支援の実績がある。財政援助をしたら腐敗官僚を産んだだけ、それではとパンを現物支給したら、口がおごって高粱やタロイモを食べなくなり、give me!というだけになった。こうした苦い経験がもとになったのだろう、やはり地域の自立を求めている。

本誌は企業人が読者対象なのだろうから、第三の点に絞ってみたい。戦後日本はGDP至上主義、ひたすら成長を追い求めてきた。効率追求は一極集中を生み出し、明治以来の官僚主導の中央集権制がさらに強化された。地方は交付金頼み、民も御上頼みで、目が東京だけを向いており、give me!とさして変わらないように見える。しかし、3.11を経験して、日本人の中に漠とした変化が生じているように感じられる。朝ドラ「あまちゃん」が

人気を博し、「地元へ帰ろう」という歌がヒットした。アメリカ的マネー資本主義で本当に幸せになれるのだろうか、ご本家のアメリカは極端な格差社会で「貧困大国」という、ブータンのような国民総幸福度GNHを求めるほうがよいのではないだろうか、エネルギーも原発よりも地産地消、自然エネルギーでまかなうべきなのではなかろうか、食料自給率がこんなに低くて大丈夫なのだろうか、等々の素朴な疑問が噴出してきたのである。

西洋史の故木村尚三郎先生は、「商業で世界を制覇したオランダやポルトガルは世界史の舞台から退いたが、第一次産業を一貫して大事にしてきたフランスは、今でも世界政治と文化の中心にいる。カルチャーの語源はラテン語の耕すだ」と言っておられた。もっと農業と地域を大事にすべきと思う。それは単純な規模拡大を意味しない。アメリカは歴史のない出稼ぎ移民の国、有限の化石地下水を浪費して超巨大スプリンクラー農業を行うような利己的な発想を採る。日本は地勢上、中山間地が多く、土砂災害などと折り合いを付けながら、自然を畏怖し共生してきたのである。別の路が求められる。しかし、工業化のおこぼれをもらうgive me!路線はダメで、中央官庁頼みではなく、民主導の地に足の着いた発展策を模索する必要がある。最近『里山資本主義』なる本がベストセラーになった。都会からのIターン農業者も増えつつあると聞く。国民の意識は変わりつつある。

ジオパークは単なる地学の普及でもなく、観光振興の道具でもない。民主導で官学を巻き込み、地域を元気にして、心優しい子供たちを育てていく新しいプロジェクトである。いわば、この国のカタチを変えていく実験事業ではないかと思う。CSR(企業の社会的責任)の一環として地域のジオパークに関わっていただけないだろうか。企業も地域の一員である。地域を元気にすることは企業を元気にすることであり、後継者養成にもつながるからである。